



高卒から大学院へ。 人生を自ら選択するためには 学びが必要でした。

私は製造業とIT企業で4回の転職を経て、現在は電気機器メーカーで働き方改革に関する新規事業開発に従事しながら、大学院で知識科学分野を学び研究しています。一方で、シェア工房や地域コミュニティの運営を通して、会社でも家庭でもない、やわらかいつながりを得られる生きやすさを感じています。

今回の原稿執筆依頼をいただいた春先、小学1年生の息子の春休みを利用してテレワークをしながら、1年4カ月ぶりに故郷に帰省しました。私が使っていた部屋には、高校卒業後しばらくして実家を出たままの勉強机が残されています。この机は、日中働きながら夜間高校に通っていた今は亡き父が使っていたものを、私が中学進学時に継いだものです。二十数年の時を隔てて再び社会人学生の私がテレワークで



使うこと、生活や働き方が変わっても父の代から50年ほど経つこの机が変わらず現役であることに、感慨深いものがあります。

私は今年で44歳になりますが、これまで遠回りばかりしてきた気がします。高校3年生の頃、大学でのAI研究を夢に胸を躍らせていましたが一転、家庭の事情により高校卒業後は就職することに。希望とは異なる進路にふてくされてのキャリアスタートでした。

●●● 社会人の礎となった最初の3年間 ●●● ●●● 僻み妬みの末、仕事に向き合う ●●●

私は地元滋賀の高校卒業後、電気コネクタメーカーの工場に就職しました。時代は就職氷河期。高校から自転車通えたこの1社のみ入社試験を受けて内定をもらい、なんとなく就職しました。なんとなくのスタートでしたが、その後の私の働き方や生き方の礎となる経験を得た3年間でした。



会社員

西川 義信

○ [にしかわ・よしのぶ] 1977年、滋賀県甲賀市出身。現在、コニカミノルタ株式会社で新規事業開発、北陸先端科学技術大学院大学の博士後期課程にて知識科学分野の研究、東京にしがわ大学学長を経てシェア工房「クミタテ」運営やNPO 法人理事など。技術経営修士。

高校生の頃からプログラミングに熱中していた私は、システムエンジニア（SE）として就職したはずが、配属は製造部。渋々就職した上に、意に染まない仕事。片や、大学生活を謳歌している友人たちを見るのが辛く、人生に嫌気が差していました。

それでも先輩たちからなにかと優しくしていただき半年が過ぎた頃、くさくさ生きるより今の仕事を好きになってみようと思分一新、職務というより好奇心で仕事に向き合い始めました。私の仕事は、戦闘機やレーシングカーなどの特殊な電気ハーネス製造で、未知なる世界の塊です。熱硬化性樹脂にまみれ、半田ゴテやCADを操り、光ファイバー技術を独学で学びました。自分の仕事のつながりを知りたくて、他部署の方たちに無邪気に質問を繰り返して、いつしか日中の電気ハーネス製造とは別に生産管理システムを夜な夜なつくり、工場の戸締まりをして帰る日々を送っていました。



>>> 私のキャリアデザイン

●●●●● ドラマのような変革

そんなある日、150人程度の長閑な日本企業だった会社が、世界各国で展開する米国企業資本100%の外資系企業となり、米国大手食品飲料企業出身者が社長に就任しました。しばらくしてストラクチャリングが敢行され、第1号として私に東京本社

の営業部配属辞令が下されました。辞令発令から1週間で転居しなくてはならない私は、物件を探しに即東京へ行き、本社へ挨拶に伺いました。挨拶回り中に工場から電話があり、上司を含む数名が解雇になったと聞かされました。翌日の朝には東京本社で、個別呼び出しの後に私物をまとめて会社を去る営業社員たちを見送りました。私は一旦、滋賀に戻るも一度も上司たちをお見かけすることがないまま東京へ転勤し、ここで私にできることがあるのだろうかと考え震えました。転勤した翌週、私は21歳の誕生日を迎えました。

未熟な私は悔しくて会社で泣いたこともありましたが、試行錯誤しながら工場で培った電気ハーネスの知識を活かして国際宇宙ステーションなど大きなプロジェクトに携わり、目標を超える営業成績を収め始めていました。営業の傍ら、貿易書類処理など営業アシスタントのためのシステムもつくっていました。

人や組織を支えるSEへの憧れが強くな

っていた私は、システム開発会社への転職を決めました。部長から引き留めていただけでも私の意志は変わらず、説得は社長に委ねられました。社長は引き留めるでもなく、玉石混淆のシステム業界へ行く私を心配しながらも応援してくださいました。「働く場所は一つの会社だけではない。社会全体を見るのだ」。その言葉に感動し、今でも心に残っています。

ストラクチャリング以前、社長は全従業員一人一人に丁寧ヒアリングをされていました。大規模な配置転換に伴い、給与の地域格差是正など、成果主義導入とともに公正な制度改革も実現されていました。上京後の私や若手社員は、社長の鞆持ちとして大きな商談や接待への同席など、社会勉強の機会もいただきました。

●●●●● 憧れのSE職と違和感

正直なところ、〃玉〃ではなく〃石〃のほうのシステム開発会社へ転職した私の年収は前職に比べて150万円も下がっていました。それでもSEのキャリアを積むべく、就ける企業へと飛び込んだのですが、最初はプロとして通用しませんでした。石にもかじりつく思いで書籍を読み漁り、規模も業界もテクノロジーも異なる案件をこなしていきました。

転職から1年半が経った頃、会社に私宛の1本の電話がありました。怪しい者では

ないと名乗る怪しい人物と会うことになりました。ヘッドハンティングというものでした。ヘッドハンター曰く、私の評判は前職の営業時代を知る人物からたどり着いたとのこと。若さという武器もあり、23歳で大手理化学機器メーカーのシステム開発関連会社へと2度目の転職を果たしました。

こちらの会社では、その後転職するまでの約16年間、臨床検査システムの企画開発として、設計から開発・運用まで手がけるフルスタックエンジニアとして、また営業担当者で専門知識でサポートするプリセールスとしての役割を担っていました。社内システムを開発し、全国の医療現場へ赴き導入し、必要とあらばプレゼンテーションに出かけていました。

この間、信じられないことに約20名の開発チームの顔ぶれが変わることはほとんどありませんでした。大それた開発管理手法を使わずともツーカーの仲で仕事が進められ、コミュニケーションも楽でした。ですが、配置転換も目標管理や教育制度もなく、人事評価制度は不透明でした。

●●●●● 会社から社会へ プロボノという働き方

仕事にマンネリを感じていた33歳、2011年の梅雨時に偶然、地域の市民大学に出会います。校舎はなく、東京の多摩地域30市町村をキャンパスに見立てた、学びを通じたコミュニティです。代表である20代



市民大学「東京にしがわ大学」では4周年イベントとして「団地のARCADE GAME」を開催

女性学長と、職員と呼ばれる運営者、学びの機会を創出する授業コーディネーター、運営や授業を支援するサポートスタッフで構成されていました。

授業は毎月2本、すべて無料で開講しています。大切なことは人集めではなく「自分が学びたいと思える授業をつくる」こと。授業コーディネーターは地域の中から先生と場所をみつけてその魅力を伝えるとともに、先生と生徒、生徒同士が学び合えるよう授業を設計します。

この市民大学にはデザイナーや編集者、料理人やプロデューサー、小学生や経営者など、社会を構成する多彩な人がかかわっていました。驚くことに、授業の先生含め誰一人として金銭的報酬は支払われておらず、「得意」を持ち寄って、自分たちでよりよい学びのコミュニティを運営していたのです。後にこれがプロボノだと知るのですが、当初私には、なぜ無報酬でこんな大変なことをしているのか、さっぱり理解できませんでした。しかもみんな楽しそうなのです。

さっぱり理解できないものですから、その魅力を知りたいと、私はズブズブとこのコミュニティにはまっていきました。一見キラキラしている活動も、Webサイトや授業受付などのシステムを、一人のエンジニアが運営している大変さに気づき、私の得意を活かしたお手伝いと、授業のサポートスタッフから始めました。

会社だけでは得られない経験

長い間、会社の仲間や顧客とのコミュニケーションばかりでしたから、市民大学では異業種の人たちと言葉が通じないものどかしい場面もありましたが、なにより協業から得られる様々な視点が生きた学びとなり、会社では得られない喜びを感じていました。

市民大学では挑戦を止める人はいませんが、そのような人をサポートしよう、一緒にやろうと思ってくれる仲間が沢山いました。私も授業コーディネーターに挑戦しました。一度授業を企画してからというもの、休日はソロ登山ばかりしていた私も地域の様々なところに出かけ、授業ネタはないかと、出会う人と場所の魅力を探すようになっていました。授業だけでなく、クラブ活動として自主的なコミュニティも生まれました。それまで一人行動派だった私も登山やキャンプを楽しむクラブを立上げ、老若男女30名での山歩きを実施しました。その頃、学生登録者数は3000人を超えていました。

2013年に職員同士の投票で2代目学長の選出が行われ、私が就任することになりました。人前で話をするのが苦手、大きな組織をまとめた経験もなく、絶対にやりたくありませんでしたが、これこそ会社では経験できない貴重な機会だと考え直し覚悟を決めました。

全額自費でシェア工房開設

市民大学の運営経験から、人が出会い協創することで新しいモノ・コトが生まれる可能性を実感した私は、小さな公園のように、ものづくりで集えるシェア工房のような場所が沢山あると、地域はきつともっと楽しくなるだろうと考えていました。

そんな気持ちをSNSで発信すると、地域のお母さんたちがクリエイティブに働ける場所として、食の起業ができるシェアキッチンをつくりたいとの思いを持った女性が現れました。彼女は開設する場所の物件候補まで持ってきてくださり、初めて会ったその日のうちに意気投合して、キッチン併設のシェア工房の実現に向けて動き出しました。

開設には資金が必要ですが、私は事業計画を書いたこともなく、実験的な取り組みで利益が出るかわからない中、金融機関に融資を申し込むのは面倒でした。そのため「楽しいだろうな」の勢いだけで300万円を自費で捻出し、キッチン併設のシェア工房のオープンとなりました。

当時の私は第一子が生まれて4カ月、会社員として年間150日の出張と市民大学の学長をしながらのスタートでした。スタッフを雇うお金もなかったため、会員を工房長と定義し、24時間365日自由に使える代わりに清掃や機器のメンテナンス、来客



>>> 私のキャリアデザイン



講演依頼を受けることも

日本工業大学専門職
大学院学位授与式にて

対応を行っていたたく運営方式にしました。同じ場所にいるシェアキッチン会員と工房長の間には自然と交流が生まれ、定例会やマルシェ出店を通して工房長同士の交流も深まり、仕事が生まれていきました。

このままではダメだ！ 社会人学生への挑戦

長年勤めていた会社では場当たり経営への不満と慣れきってしまった仕事に、環境を変えなければ40歳代を惰性で生きてしまい、ある日突然変革が訪れたときに生き残れないという危機感を感じていました。そこで転職活動を試みるも、偏った仕事の経験と情熱だけで評価されるほど甘い年齢ではないことを痛感しました。

学長として組織運営に苦しんだこと、シェア工房の事業計画が書けなかったこと、難航する転職活動も含め、これらすべての原因は圧倒的な知識不足だと気づきました。客観的に評価できる形で自分をバージョンアップするしかなかった。3年間の学長任期を終えてすぐ、経営学を学ぶことを決意し、日本工業大学専門職大学院を受験することにしました。高卒だった私は、まずは出願資格事前認定審査をパスし、それから大学院入試を受けて晴れて入学が許可されました。39歳のときでした。

大学院で得たもの

幸いなことに、大学院入学と同時期に

IT企業に3度目の転職を果たし、製造業向けAI・IoT事業立上げのリーダーとして10名の部下を持ち、学びと実践を同時に進めることができました。しかし、夜間の授業中に仕事の緊急連絡が入ったり、週末は授業と課題研究の追い込み、同時に新たなシェア工房の立上げも進めて、毎日朝から深夜までフル稼働のハードな日々でした。

大学院では教授と学生の距離が近く、社会人学生が集まっていることもあり、それぞれの専門性を尊重し、その相乗効果によって生きた学問が学べました。豊富な経験を、体系立てた知識で補って知恵として生かせることが、社会人学生の強みだと思います。家族の理解と苦勞の甲斐もあって、自分の思いやチームのビジョン、事業遂行に必要なポイントを論理的に整理して伝えることができるようになったことで、大きな自信になりました。

もらう働き方、払う働き方

人前で話をするのが苦手だった私が、市民大学の学長として講演依頼や取材を受け、ラジオにも出演する機会に恵まれ鍛えられました。誰かの居場所をつくるつもりで開設したシェア工房のおかげで地域とつながり、いつの間にか地域の中に自分の居場所ができていました。これらの活動や学びが私のポートフォリオとなり、様々な施設開設

や地域コミュニティ運営、大学や小学校での登壇につながっています。

いわゆる「もらう働き方」として、労働力を提供して給与を得ることは生活する上で重要なことです。ですが、本当の面白さや可能性は、「払う働き方」にあるのではと感じます。払うのはお金ではありません。地域の何かのサポートでもいい。まずは自らが出すことで生まれる関係性が、人生を豊かにする息の長い対価として返ってくる。そして何かあっても「だいたい生きていける」。そんな風に思えます。

人生を 自分で選択し続けていきたい

これからの時代は脱専門家、すなわち複数の専門性を掛け合わせて「何屋なのか、一言で表現しにくい」複雑性を持つことが必要だと考えています。そのためには学び続けて専門分野を増やし、自らの衝動で実践を繰り返す。なぜなら、人生を自分で選択し続けていきたいから。

2年前に、これまでの活動すべてを評価していただいた現在の会社に転職して、働き方改革支援のサービス開発を行っています。例えば日本では年間10万人が介護離職しています。出社すること自体は仕事ではありません。時間や場所に縛られない働き方と、偶然の出会いや経験が得られる場の創出で、誰もが「IKIGAI」のある社会を公私混同で実現したいと思っています。